

平成 28 年度 事業報告

社会福祉法人富山城南会

1. 概要

社会福祉法人制度の改革、福祉人材の確保を軸とした社会福祉法の一部を改正する法律が施行された。とりわけ制度改革による経営組織のガバナンスの強化、事業運営の透明性の確保、及び財務規律の強化は今後の社会福祉法人の存在意義を確保、高める上でも必須である。また、併せて当法人はその基準に該当することから会計監査人の導入に向けての準備も進めている。

2. 運営状況

収入面では高齢者施設は第6期介護報酬改定の2年目にあたり、介護職員処遇改善加算(I)を取得はしたものの、各事業所の利用率は苦戦、介護施設全体としては減収を余儀なくされた。しかし、保育施設は新制度が軌道に乗ったこと、園児数の増加と相まって増収となり、法人全体としても増収となった。

一方、支出面では、法人全体として介護、保育両面での処遇改善による人件費の大幅増、にながわ敬寿苑の厨房内省化による諸経費増、今期から導入した賞与引当金(89百万円)等の影響により大幅増となった。

結果、経常活動収益 3,618 百万円(前期比+40 百万円)、同費用 3,599 百万円(前期比+290 百万円)、同増減差額 19 百万円(前期比▲250 百万円)と増収減益となった。

3. その他

介護、保育とも給与待遇の改善、研修支援制度の拡充等により、処遇改善に努めた。

労務管理の効率化と、労働環境の改善を目的として、就業管理システムを導入した。

平成 28 年度事業報告書

施設名 特別養護老人ホーム敬寿苑

1、概要

平成 27 年度と同様、人手不足を回避する事が出来ませんでした。

又、施設入所者 1 名が職員に対しての中傷的・侮辱発言を繰り返し、その家族においても、一方的に法人や行政等に苦情を訴える行動が見られ、各方面に迷惑をかける状況になり保険者(上市町)の協力を得ながら、3 月をもって退所となりました。

今後の世情がこのような流れが多くなると想像され、入所時には特に注意をしながら見極めに重点をおかなければならないと感じます。

2、施設状況

(1) 長期入所

・年間入院者総数は、過去 5 年間の入院者総数と比較して、やや減少(約 10 人)でした。又医療機関側の早期判断によって長期入院が決定する場合や入院中の居住費徴収に伴い、家族からの早期退所の申し出があることから、個々の入院日数も短縮傾向がみられました。

(2) 短期入所

・長期入所を目的とした長期利用者と在宅生活を基盤とした定期利用に分けた提供の中で、時期によって男女の依頼希望者や利用希望日数に差が見られた。そのため、長期入所者の入退所状況と踏まえながら、適宣、提供居室の変更・調整を行い、受け入れに努めた。次年度は、施設改修工事も開始されることから、さらに流動的に対応ができるように考慮していく必要がある。

(3) 通所介護

- ・4 月より中重度ケア体制加算の開始
- ・新規利用者の紹介が増えるがそれ以上の入院・入所者が出ている。
- ・上記の入院・入所者に認知症加算対象の方がかなり含まれており、8 月より認知症加算対象者の減少により加算中止となる。
- ・フラワーアレンジメント教室を 3 回開催し、利用者の反応は良く今後も開催予定。
- ・H29.1.16 より國多慶子さんが雑務として配属される。
- ・月利用者延人数が 700 以下のまま年度を終える。
- ・上記の結果より来年度は通常規模となる。

(4) 訪問介護

- ・利用者様ができることはして頂けるように促し、一緒に行ったりできないところを支援することによって自立心の向上に努める

(5) 在宅介護支援

- ・本年度は介護支援専門員の更新研修に 4 人参加し、無事終了することが出来ました。また、本年度より介護支援専門員実務者研修のための実習生を 2 人受け入れ、特定事業所の役割を果たしました。

一人あたりの担当件数は平均 35 人程度で、重度割は 47～49%をキープしている状況です。困難事例に対しても富山市や包括支援センターと連携し対応しています。スタッフ 1 人 1 人が研修にも積極的に参加しており、事業所内の雰囲気も良く仕事できています。

(6) 南居宅支援

- ・4 月より職員の入れ替わりはあったが、特定事業所加算Ⅲは継続できた。利用者の出入りはあったが、1 か月あたりの計画数は総数 110 件前後を維持している。介護度の重度割が関係しないため、紹介があれば一旦ケースを受け、グループ内の事業所へ繋げるように努力した。人員増は難しく、件数制限（117 件）があるため法人の利用に繋がる可能性のないケースを他へ引き継ぎし、新たなケースを受入れながら紹介に繋げた。

(7) 包括支援センター

- ・富山市から委託されている地域包括支援センター業務は年度当初に立てた計画の通りに行うことができました。民生委員や長寿会・婦人会等地域の方々を対象に介護予防の説明会を開催したり、個人事例のネットワーク構築に協力していただきました。また、地域のケアマネージャーやサービス事業所と共に事例検討会や連携推進会議を開催いたしました。

月平均 10～15 件の新規相談をお受けしています。指定介護予防支援（要支援認定者のケアプラン）は月平均約 180 件以上を担当いたしました。

相談を受ける中で、要介護認定を受けられた方のケアプラン作成は、法人内の居宅介護支援事業所へ相談しながら担当を依頼いたしました。

3、その他特記事項など

なし

平成 28 年度事業報告書

施設名 特別養護老人ホーム ふるさと敬寿苑

1、概要

平成 28 年度は、介護職員処遇改善加算（Ⅰ）を取得したことと、特養の入所率が向上したことや全体的に各事業が順調に推移したことにより増収となる。その一方職員の処遇改善を旨とした人件費の増加や施設開設 15 年目を迎え送迎車両や配膳車、食器等の買い替えやいろいろな設備の修繕等に経費がかかる一年であった。

そうすることによって、利用者の方々に少しでもより良いサービスを提供できるように、また職員にとっても働きやすい環境や待遇改善をはかり人材の確保に努めたところである。

地域包括ケアシステムの基本的な考え方を実現すべく高齢者の尊厳保持と自立支援を推進し皆様から信頼を受ける地域の拠点施設を目指し施設運営に取り組んでいるところである。

2、施設状況

経常活動収入では、対前年比 102%で微増見込みであるが連続で過去最高。その一方で経常活動支出は対前年比 106%の見込み。

① 特養部門

特養入所率 94.44%と対前年比 102%、売上 104%と増加、短期入所率対前年比 101%、売上 104%と増加。

② デイサービス

利用率対前年比 97%売上対前年比 96%と減少課題を残す。

③ 訪問介護

訪問回数は減少するが報酬増の影響売上 101%と横ばい。

④ 居宅介護支援事業所

担当件数、対前年比 104%売上 105%と順調に推移する。

⑤ 地域包括支援センター

地域の皆様と連携しながら介護予防を含め様々な相談に対応する、要支援担当件数、対前年比 107%売上 101%となる。

3、その他特記事項など

施設内外の研修に積極的に参加し職員の質の向上とともに確保に努める。

平成 28 年度事業報告書

施設名 介護老人保健施設 シルバーケア羽根苑

1、概要

1 2 月に施設長が交代した。トップの交代は昨年度から続いた。不安定な状態は前年度同様に続いた。上半期は施設長による入所に対する判定が厳格化され、新規入所者が獲得できない状況が続いた。また、病院へ入院退所が続き入所率が下がった。最終的な目標を達成できず減収となる。1 2 月に就任された施設長のもと入所を徐々に回復しつつある。また、通所に関しては堅実に推移し利用者を微増する。また、訪問リハビリは減収となった。

2、施設状況

- (1) 事業の収入は全体で 6. 0 % 減収、内訳については老健入所が、延入所者数は 3 1, 6 6 0 人、対前年比 - 2, 2 4 5 人。1 日平均入所者数は 8 6. 7 人、前年度対比 - 5. 9 人。
通所リハが、延利用者数 6, 8 2 8 人前年対比 + 2 8 人、1 日平均利用者数 2 6. 5 人。対前年 + 0. 2 人。定員 3 0 人に対する利用率は 8 8. 2 %、対前年比 + 0. 6 %
訪問リハは、延算定回数 1, 5 8 5 回、前年対比 - 1 5 7 回。
- (2) 平成 2 8 年度前半に新規入所の判定を厳しくしたところ入所の申し込みもなくなり入所者が 8 0 人を割り込む状態になった時期があった。こうした状況を回避するためグループ法人からの協力により入所を増やすことができた。しかし、大きく収入を減らす要因になった。
通所は、利用者数を落とさず推移できた。訪問リハビリは登録者の入院や職員の産休などで減収になった。
- (3) 今年度中に主力の介護職員が 2 名退職した。介護職員 3 名、リハビリ職員 2 名が産休で人材不足になった。特に介護職員はハローワークや人材紹介会社に問い合わせたが成果がなかった。現在、非常勤職員や契約職員で日中については対応ができるが。夜勤ができる介護職員は不足している。

3、その他特記事項など

- (1) 開設以来 1 5 年経過し経年劣化したところの新規購入や修繕が相次いだ。温冷配膳車を新規に購入。冷凍庫が故障し修繕を行った。洗濯機や乾燥機故障による新規購入。トイレや洗面台の修理など、修繕や新規購入が

つづいた。

- (2) 2階廊下の蛍光灯の本体が故障し、蛍光灯からLEDへ交換した。1階もLEDへ変更を行った。
- (3) 居室のベットのストッパー効かないため半数以上の修繕を行った。

平成28年度事業報告書

施設名 老人福祉施設 しみずまち敬寿苑

I 概要

地域福祉の拠点として「住み慣れた地域で自分らしい生活を続けられるようにする。」を前年度よりの継続目標とし、施設内外での研修、地域の文化祭参加や小中学生等との交流を通して、ひとりひとりの職員が専門職としての向上心を持ち、施設内だけでなく地域の中での役割を自覚できるよう努めました。

健康管理については、感染予防対策の徹底とインフルエンザ発生時の早期予防薬投与実施で、感染拡大には至りませんでした。

II 施設状況

1) 施設整備について

6月 3階排煙窓の開閉ハンドル修理

7月 1階廊下 給茶機設置

9月 1階デイサービスオストメイト修理

ショート2階廊下及び浴室に柵設置

10月 玄関自動ドアの溶接4か所はずれ修理

12月 デイ浴室と脱衣室間の引戸故障修理。

1月 4階居宅支援事業所内縦型ブラインド下キャップが外れ修理。

2) 職員の資格取得について

介護福祉士合格1名

健康運動指導士合格1名

認知症介護実践者研修終了1名

3) 苦情・事故について

ヒヤリハット36件

事故報告187件（内5件は県・保険者へ報告）

苦情148件

労災2件 デイ職員 送迎時 利用者宅玄関の段差を踏みはずし骨折。

デイ職員 送迎時 送迎車のドアに手を挟み打撲。

近隣対策（騒音）について 防音シートの補修

4) 実習・体験学習 受け入れについて

富山県立富山いずみ高等学校専攻科看護科 5月~9月

東部中学校 14歳の挑戦 5~6月

富山県新任職員研修 10月

富山短期大学介護実習 8月

中央小学校5年生 9月・10月・11月

5) ボランティアについて

柳瀬さん歌謡ショー・歌謡夢一座ショー・四つ葉のクローバー（オカリナと歌）・脳トレ・和玲の会・高山さん歌謡ショー・マジックショー吉浦さん・民謡（石田さん・藤岡さん）・藤木さん（踊り）・北川さん（踊り・演奏など）・ハーモニカ演奏・赤ちゃんボランティア（保健センター）

Ⅲ 運営状況

1) 短期入所

機能訓練を特徴としたサービスが利用者様やケアマネジャーに周知され、レスパイトや保護だけでなく在宅復帰を目指すための利用が増加しました。

・利用状況（定員48）

月平均実人数130.4名（昨年比104%）、1日平均人数43.3名（昨年比101%）、平均利用率90.3%（昨年比89.0%）、平均介護度2.6、個別機能訓練取得率37%

・離職者4名 入職者6名

・実地指導 指摘事項なし。

2) 通所介護

介護計画書、報告書など書類の見直しを行い利用者様、ご家族様、ケアマネジャーに信頼していただけるよう努めました。

・利用状況（定員40）大規模減算Ⅰ（月平均856名）

月平均実人数116名（昨年比100%）、1日平均人数33.2名（昨年比98.5%）平均利用率83.0%（昨年比98.5%）平均介護度1.9

・離職2名 入職1名

・実地指導 書類整理の不備による指摘事項ありましたが、改善報告した結果、減算はありませんでした。

3) 訪問介護

実技や体験、同行訪問による研修を継続し資質向上に努めました。

・利用状況

月平均実人数 61.7名（昨年比99%）月平均訪問回数 641回（昨年比91%）

- ・常勤2名 登録6名。※登録1名離職。登録ヘルパーの一部が他事業所との掛け持ちとなり稼働時間が減少しました。
- ・実地指導 指摘事項なし。

4) 訪問看護

地域包括ケア事業の一員として、保健福祉センターの保健師や医師、歯科医師との交流・情報交換を行うことができました。

研修参加だけでなく、医療度の高い利用者様への訪問回数が増えたことにより、初めての医療機器に携わる機会をもつことができ資質向上に繋がりました。若いスタッフの訪問看護入職希望があり常勤3名 非常勤3名体制となりました。（4月より常勤5名 非常勤2名の予定）

・利用状況

月平均実人員 39.7名（昨年比93%）月平均利用回数 268回（昨年比101%）

- ・異動1名 入職2名
- ・実地指導 指摘事項なし。

5) 居宅介護支援事業

事業所内外において事例検討会等の研修に参加し個々のレベルアップや他事業所との情報交換、連携を深めました。

- ・支援状況 月平均 112名+予防6名
- ・異動2名 入職3名（内1名離職）

6) 柳町、清水町地域包括支援センター

3名体制での活動でしたが、地域の諸行事には例年通り関わることができ、介護予防啓発活動や委託事業についても計画通り実施できました。

- ・異動2名 入職1名（しみずまち居宅より異動）

平成 28 年度事業報告書

施設名 総合福祉センター にながわ敬寿苑

1、概要

大きな運営変更として、秋乃家の給食業務の委託業者が 4 月に撤退したことにより、5 月に秋乃家栄養課を新設、直営となったことである。城南会の協力も得ることができ、試行錯誤ながら年度終わりにはシステムを構築できる。ただし、栄養士、調理員を新たに採用したことによる人件費とパソコンや栄養課専用ソフトの購入等による事務費が大きく膨らみ収支を悪化させた要因となる。

年度当初に組織図を作成するも、職員の退職などにより何度も組織変更を余儀なくされ、最低限の職員は確保できたものの、職員の質の向上は図れない状況であった。

2、施設状況

(1) 入所系事業のユニットケアとグループホームは 100%に近い入所率を達成する。職員の細かな配慮により、体調不良となっても早期に対処した成果であると考えられる。

(2) 居宅系事業のデイサービスは対前年比 112%、1 日平均 32.8 人の利用があり、平成 27 年度より大きく収入も増加する。相談員の頑張り職員が一体となって利用者を増やそうとした成果が数字となって表れた。

ショートステイは 11 月までは利用率は好調であったが、相談員が代わったことと職員の一体感に欠けたことにより、下半期は大幅に利用率を下げる結果となった。

ケアコミュニティは登録利用者がなかなか増やせない状況が続いたのと、泊まり利用者の減少が響き大きく収入を減らすこととなる。地域包括や居宅事業所に何度も出向くが、契約までには結びつかない事が多かった。

(3) 居宅介護支援は 4 月に 1 名増員し、3 人体制で運営するはずであったが、1 名退職したことにより当初の計画から狂い、登録者も収入も減少となる。

3、その他特記事項など

(1) 秋乃家の 3 事業は設立 6 年を向え、すべて指定更新を行う。

(2) 6 月にデイサービス、ショートステイ、ヘルパー事業の富山市指導監査がありデイサービスに対して指摘を受ける。加算の解釈間違いであり、国と利用者に対して返戻・返金を行い年度中に処理を終える。

(3) 秋乃家の空調設備が相次いで故障するも、夜間の修理を実施するなど、利用者への影響は最低限に留める。

平成 28 年度事業報告書

施設名 軽費老人ホーム ケアハウス婦中苑

1、概要

平成 28 年度における入居者の状況は、要支援・要介護認定率は平成 27 年度の 76%とほぼ横ばいの 75%であった。介護保険で何らかのサービスを利用して当施設での生活を継続するという形態は高い割合で続いている。

年度を通して、入居の問い合わせが一定数あり、前年度より年間延べ入居者数が増加した。競合するサービス付き高齢者向け住宅等があるものの、当施設の特徴である、広い敷地にゆったりとした建物の造り、隣接のふるさと敬寿苑・シルバーケア羽根苑との連携を活かした連続性のあるサービスの提供は、開設当初から色あせることなく機能しており、利用率増加の大きな要因になっている。

今年度入居された 17 名の内訳は、自宅からが 13 名、グループ外の病院からが 3 名、グループ内のショートステイからが 1 名であった。

また、退去者は 14 名で内訳は、グループ内の医療・福祉施設が 6 名（病院 2、ショートステイ 2、老健 1、グループホーム 1）、グループ外が 8 名（病院 4、サービス付き高齢者向け住宅 2、家族宅 1、死去 1…病院で入院約 1 か月後）となった。グループ内の各病院・施設等への数が今年度は伸び悩んだ。

今後も入居者の安心安全のために質の高いサービスを維持・継続できるよう努めたい。

2、施設状況

（施設の管理運営状況など）

	項目	平成 28 年度	平成 27 年度
1	年間延べ入居者数	21,583 名	21,475 名
2	月平均入居者数	59.13 名	58.67 名
3	要介護認定率	75%	76%
4	年間居宅サービス利用者数/利用回数	282 名/1,992 回	361 名/2,519 回
5	年間通所サービス利用者数/利用回数	335 名/2,756 回	313 名/2,467 回

3、その他特記事項など

7 月に、懸案の修繕事項の一つであった、正面玄関前・床面タイルの修繕を行った。開設当初からの定例行事・納涼祭は、今年度で 15 回目となった。

平成 28 年度事業報告書

施設名 軽費老人ホーム ケアハウス城南

1. 概要

入居者の平均年齢が 84.6 歳で、配膳や服薬に支援が必要な人が多くなってきている。介護保険の認定を受け介護サービスを利用しながらケアハウスの日常生活を維持している。日頃の体調管理に気を配り心身ともに充実した明るい生活が継続できるよう支援を行っている。毎日行っているリハビリ体操は好評で参加者が増加した。

設備では、クーリングタワー修理、女子浴室脱衣場換気扇交換、浴室ドアの修理、厨房空調機、冷蔵庫、漏水の修理、炊飯器の買い替えなど経年劣化による修繕が多くなった。

入居率は 99.2%と安定しており退去者が少なかった。栄養バランスの摂れた食事の提供や日頃の健康観察により、体調変化を早期に気づき、家族や関係機関と連携し対応を行うことで安定した生活の維持に繋がっている。今後も安心して生活して頂けるよう職員一同努力していく方針である。

2. 施設状況

(施設の管理運営状況など)

項目	平成 28 年度	平成 27 年度
入居率	99.27%	97.76%
入居者平均年齢	84.6 歳	83.8 歳
介護認定率	83.6%	84%
年間訪問介護サービス利用者数/回数	381 名/3574 回	359 名/2767 回
年間通所サービス利用者数/回数	280 名/2066 回	277 名/1985 回

3. その他特記事項など

平成 29 年 4 月より「軽費老人ホームの利用料等取扱基準」の改正がある。

生活費（食材費及び共有の光熱費） 旧 44810 円⇒新 46090 円

冬季加算（11 月から 3 月まで） 旧 5180 ⇒新 5320 円

平成 28 年度事業報告書

施設名 幼保連携型認定こども園
城南もなみ学園

1 概要

幼保連携型認定型こども園の移行に伴い、園児が大幅に増えた。特に 3 歳未満児の途中入園の希望が多く、できるだけ受け入れるように対応した。3 歳以上児では、働き方に応じて 1 号認定から 2 号認定に変更、育休で 1 号認定に変更する等幼保連携のシステムが活用された。29 年度の入園の定員については、進級児が多く新規の 1・2 歳児が入園できないため 10 名増員で 200 名に変更した。(29 年度より年齢の定員数を超えてはならない)

2 施設状況

- ・子ども達が意欲をもって生活をし、主体的に遊びを展開する保育をすることをねらいに各年齢にあった保育を実践する。毎日の保育では、疑問や戸惑いもあったが話し合いを重ねて進めることができた。
- ・年長児用トイレと乳児の調乳室、トイレの修繕を行なう。清潔に快適に使用できるようになった。
- ・園庭の樹木の剪定をすることで、樹木の風通しが良くなり明るくなった。また、雨が降ったら水はけが悪く土が乾くまで遊べなかったのが、剪定で水はけが良くなり解決できた。
- ・今年度は 3 名の保育教諭を新規採用した。組織の財産は「人」である。人が辞めない、病まない職場をつくることが最重要課題である。しかし、年度末には、2 人が退職する結果になった。保育士という職がなかった等それぞれの理由はあるが、「助け合い」と「コミュニケーション」はどうだったか、人間関係は？等を検証し対応していきたい。

3 その他特記事項など

- ・1 学期、2 学期は運動会や発表会等大きな行事があり、時間内に仕事を終える事が難しかった。計画表を作り全職員が見えるところに掲示して意識できるようにしたことで、時間を効率的に使い仕事をこなすことができた。仕事の軽減化を具体的に考えていきたい。

平成28年度事業報告書

施設名 光陽もなみ保育園

1、概要

- ・今年度は0歳児途中入園希望者が多く、上半期でほぼ予定人数となった。年度当初から途中対応保育士をあてていたため、問題なく受け入れることができ、保護者のニーズにあった保育ができた。
- ・子育て支援センターは常にたくさんの利用者がいる。これからも子育て支援の場として内容を充実し地域に貢献していく。

2、施設状況

施設面

- ・乳児棟排水管の修理など大掛かりな工事があったが、その都度早めの対応に努めてきた。

特別保育事業の充実

- ・延長保育、休日保育は、利用率も高く、民営化の機能を拡大し、保護者や児童への福祉の向上を推進できた。
- ・子育て支援センターを開始してから、地域の未就園児利用者数も順調に増え、地域に浸透し貢献できている。

健康と安全管理

- ・アレルギー児の方が一の誤食があった場合の対応として、アレルギー対応訓練を5回実施した。
また、エピペン接種の講習をするなど、昨年度同様職員間で周知に努めた。
- ・保育中の事故防止強化のため、ヒヤリハット委員会を設置した。記録用紙にいつでも書けるよう各クラスに準備して置き、委員会メンバーで分析し危険度をチェックしたものを職員全員に周知した。結果、大きな事故もなく、職員の意識向上につながった。
- ・災害時対応訓練は、年間通して土曜保育4回、休日保育1回増やした。職員が少人数の場合の避難方法を改めて知ることができた。

保育内容の充実

- ・保育の目標、保育の方法、保育の環境について再考し、園の実態に合った保育の計画(発達課程、指導計画)作りを進めてきた。
- ・年長児が街に出かけ、公共の乗り物を利用し、街の人と触れ合う中で多種多様な社会環境を知ることができた。
- ・園内研修で、園内や園周辺の危険箇所を予測したハザードマップを作成した。職員間でグループ討議をしながら進めていくことで、保育の現場でのリスクマネジメントとしてとても役に立った。

平成 28 年度事業報告書

施設名 幼保連携型認定こども園
婦中もなみ保育園

1、概要

平成 29 年度から幼保連携型認定こども園に移行する準備期間として、申請書類の提出や園児の募集、保護者への説明会などを行った。保護者には早い段階から園だよりや説明会、保育参観の時に知らせていた為、混乱なく進めることができた。認定こども園に向けての保育内容や書類については、園内研修を設け、職員間で共通理解できるように話し合った。

職員配置では、副主任をフリー保育士とし、担任ではなく、客観的に保育をみつめ、保育士の育成や保育園全体の力を高めていった。また、正規職員を増やし、職員の仕事を減らし、負担のないように働けるようにした。しかし、勤務時間は超過勤務を減らそうと努力したが難しかった。

保育内容は今までしてきたことを改めて見直し、行事の際はねらいや意味を考え、職員で話し合った。

1 月から衛生委員会を立ち上げ、職員の安全衛生管理を行った。看護師を中心に組織づくりをし、来年度につなげた。

2、施設状況

動物（羊、クジャク）が老衰の為、死亡した。動物は送迎時に親子で観て、癒されたり、生命の大切さを感じたりと子ども達の情操教育につながっている。

施設の設立 11 年目になると施設のメンテナンスが必要になっている。

環境向上の補助金で、園庭のゴムチップを新しく設置した。また、消火器が 10 年で使用期限になり、11 本を新しい物にした。冷暖房の不具合が障り、部品交換をする。園バスの床が老朽化して、交換の必要がある。

認定こども園に向けて、看板の名称を替えた。また、会計システム、登園システムを取り入れる準備をした。

3、その他特記事項など

園バスの購入や今後どうするかについては、慎重に検討している。

平成 28 年度事業報告書

施設名 放課後児童クラブ もなみ子どもクラブ

1、概要

今年度、放課後児童クラブ「もなみ子どもクラブ」は、十年目の運営となりました。一億総活躍社会、女性の輝く社会づくり、女性の就業率を向上させる内閣府の男女共同参画等の社会の動きと連動してか、両親が就業のための放課後児童クラブの利用希望が増えたことで、定員の変更を余儀なくされた。ランドセルの収納棚を 88 名分から 144 名分へ。下足収納棚 70 名分増へ。食器の大量購入等、随時購入をいただき感謝申し上げます。

2、施設状況

- ①読書室の図書 3, 850 冊に破損、傷みが 200 冊以上に及んでいる。
また、近年 3 年間の購入本の傷みが多い。興味深い図書（サバイバルシリーズ、実験シリーズ、かいけつゾロリ、図鑑等）であったことで、小学生の読書好き、将来に夢を持つツールになる図書内容の充実を更に図るべきと実感します。
- ②平成 29 年度の定員は、もなみ子どもクラブ A 45 名、B 45 名、C 45 名（135 名）で運営致します。小学 1 年生から 6 年生までの学習、スポーツ、様々な遊びに対応できる施設となる努力を重ねてまいりました。今年度も苦情は特になかったものの、各学年の小さいじめに心を痛めます。
- ③法人全体から様々な支援をいただき、今年度も「もなみ子どもクラブ」を存分に展開することができました。職員一人一人がすばらしい環境を与えてくださったことに感謝し、『もなみブランド』を高める努力をした。

3、その他特記事項など

行政からの指導等もいただき、小学生一人一人の安全のために最大の努力を払ってまいりました。大きなケガもなく、インフルエンザの大流行の兆しがありましたが、もなみ子どもクラブ内での変化も特になく、職員のインフルエンザ罹患もなく、年度を終えることができました。次年度も気を引き締め、健康管理、安全管理に活かしたいと考えます。

平成 28 年度事業報告書

施設名 放課後児童クラブ
婦中もなみ子どもクラブ

1、概要

保育園内にある放課後児童クラブの利用ニーズが高く、レギュラー会員の継続した利用が定着した。

更に、国の制度変更により補助金の計算方式が変わり、放課後児童健全育成事業費の増額や、処遇改善事業費の追加などによる補助金収入が増え、安定した運営を行うことができた。

2、施設状況

- ・有資格者の指導員が見守る中、大きな事故やけが等もなく、継続して子どもクラブを利用していただいた。
- ・登録児童のうち、平日は平均 25 名の利用があった。長期休業日はスポット会員を含めて平均 45 名の利用があり、特に夏期休業期間は利用者が急増するので、年度途中の受け入れを制限した。
- ・児童の支援記録をもとに、発達の個人差を踏まえて一人ひとりの育成支援を行った。
- ・クラブでの子どもの様子を活動アルバムなどを通して、定期的にすべての家庭に伝えるよう努めた。
- ・2名の職員が放課後児童支援員の資格を取得し、放課後児童クラブの運営基準となる職員体制が整った。

3、その他特記事項など

- ・高学年児童の利用増加に伴い、学習スペースの確保が難しくなっている。